

友達から学ぶ学習環境づくりの工夫

一徹国語人

沖縄県下の学校を歩いていると、多くの教室で、子どもたちに物語や詩などを読ませて、その内容を絵にかかせるという学習をしていることに気づいた。一部に読書感想画に力を入れる学校もあるが、それよりも自分が理解した内容を絵に表現するという学習が多かったように思う。

わたしは今まで、どちらかというと理解することと表現することとは、本来別の能力ではないか、と考えてきた。したがって、現役の教師のころ、理解力を育てる学習に表現活動を多用する（時間をかける）ことはあまりしなかった。深い読み取りができたからといって、そのことが豊かな表現へとつながらない子がいた。逆に、十分な理解ができていなくても、内容を表現してみるとそのすばらしさに驚かされるという場合もあった。

今回いくつかの学校で目にした絵は、その構図といい色づかいといい、いずれも実に深みのあるものだった。子

どもたちが掲示された絵を互に見合うという学習活動が、読み深めの効果を生んでいることに新鮮さを感じた。そして、かき込んだ作品を見せ合うことで理解情報の交換会的意味（価値）を強くもってくるのだと知らされた。子どもたちは、仲間の絵をじつと見入った後、教科書の本文を改めて読んだりするようだった。それは個別の自由再読であるが、国語の学習時間には入れていないという。

こつした学習は、絵をかかせる時間がどれくらいかかるのか学習時間の配分が気になるところだが、一度は試みる意義はあるように思う。当然のことながら、かかせるときに、個々へのアドバイスと全体指導の工夫が必要だろう。指示が、細かすぎたり限定したりしてはいけない。なんの視点ももたせないのも問題である。学年や教材によりいろいろな配慮がほしい。

理解と表現をつなぐ（表現を理解に応用する）学習といえ、昨年度、東京都下の学校を見学した際の俳句作

りの学習を思い起こした。そこでの授業を見せていただいた後でわたしは、ほかの学校の子どもたちと作品の交換交流をされたらいかがですかとその先生に呼びかけ、以前、自分が訪問したある学校を紹介した。

わたしが訪れたその学校では、理解単元に限定することなく、朝の時間などを利用して俳句作りをさせていた。季節ごとに出来事や様子から季語を選んで俳句を作らせていくのである。

指導をされた先生によると、子どもたちは当初は、ふだん何気なく感じ取っている季節感を俳句として表現していくことがなかなかできなかったようだ。確かに、感じ取っているものを何かの形に表現することは、大人であるわたしたちにも容易なことではないだろう。そこで先生は、子どもたちに、身の回りのものをよく見たり観察したりするよう指導したと話されていた。さらに、上手な句を作ることが目的ではなく、自分の気持ちを素直に表現するようにも誘った。子どもたちは、徐々に、五七五のリズムを楽しみ、俳句作りに親しみ始めた。

俳句作りという学習の多様性を生かし、子どもの理解力や認識力の育成に努めているようだった。さまざまな機会をとらえて国語の力をつけていくことが、その子どもの一生涯にかかわるとても大切なことである、とわたし自身、あらためて思い知った。

その後、双方の学校で作品の交換交流が行われたと聞いた。同じテーマや季語で作った俳句を読み合うことで、双方の学校の子どもたちの感性や認識の違いに気づくことができて実におもしろいと、子どもたちや担任の先生は喜んでいて。

一徹国語人がお答えします

ある読者から「机間巡視」という言葉は、自分の住む地域の学校ではあまり使わないようだが、地域によって違いがあるのだろうか、というお問い合わせをいただきました。わたしが調べたところ、この言葉は、全国でさまざまなとらえ方や使われ方がなされているようです。光村図書の指導書を調べてみると、「机間巡視」というくり方ではなく、具体的にその時々の方針や留意点に即して、「観察」「指導」「評価」といった表現が使われていました。貴重なご指摘をいただきまして、誠にありがとうございます。

一徹国語人にご意見・ご質問がある方は、広報課までお便りをお寄せください。一徹国語人ご本人がお返事をいたします。お便りは、誌上にて紹介させていただく場合がありますので、あらかじめご了承ください。

FAX 03-3493-5483

E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp